EUROPEAN LITERATURE FESTIVAL

# 越境する欧羅巴文学

ヨーロッパ各国の作家や翻訳者が日本の識者と共に朗読やレクチャー、対談、パネルディスカッションに参加。さまざまなイベントを通じて注目のヨーロッパ人作家や作品を紹介します。

EUROPEAN LITERATURE FESTIVAL 3rd

# ヨーロッパ文芸フェスティバル

## 2-4 NOV. 2019

参加無料・要事前申し込み

主催 駐日欧州連合(EU)代表部・在日EU加盟国大使館・EUNIC Japan(在日EU加盟国文化機関)

協力 一般社団法人リットストック　後援 J-WAVE

EUNIC JAPAN

プログラム詳細・お申し込みはこちら

eulitfest.jp　www.facebook.com/eulitfestjp　@eulitfestjp

DAY 1

# 11/2 土 インスティトゥト・セルバンテス東京 （開場 11:00）11:30▶19:00

会場　オーディトリアム ※日本語・英語同時通訳

## 1 ヨナス・ヨナソン「ヨーロッパの外へ、そして中へ」 11:30▶12:30

ヨナス・ヨナソンが2009年に発表した『窓から逃げた100歳老人』（西村書店、2014年）は、故郷を飛び出した高齢者が世界を変えるという諷刺小説でした。続篇『世界を救う100歳老人』（西村書店、2019年）では、国際政治の中で揺れる欧州が描かれます。ヨナソンが見る欧州とは、そして世界とは? ヨナソンの小説に強い関心を寄せてきた杉江松恋が、作家本人から聞き出します。

©Anna-Lena Ahlström

**ヨナス・ヨナソン**
Jonas JONASSON
1961年スウェーデンのヴェクショー生まれ。テレビ、新聞などのメディアで20年以上の活躍を経て作家に転身。

**聞き手　杉江松恋**
SUGIE McKoy
1968年、東京都生まれ。文筆家。主としてミステリー分野の書評・評論を中心に執筆を行う。

## 2 北欧から日本へ――翻訳者パネルディスカッション 13:20▶14:20

北欧のさまざまなジャンルの本と日々向き合い、試行錯誤を重ねている翻訳者たちが、北欧各国の言語の翻訳に携わろうと考えたきっかけ、北欧文学を日本語に翻訳することの意義、その楽しさ、難しさ、今後の課題などについて、ざっくばらんに語ります。北欧文学の最新トレンドも紹介します。

**パネルディスカッション**
**久山葉子**（スウェーデン語翻訳者）
**枇谷玲子**（デンマーク語翻訳者）
**古市真由美**（フィンランド語翻訳者・ゲスト参加）

**プレゼンテーション**
**セルボ貴子**（映像での参加）
**中村冬美　羽根　由**
**よこのなな**

**司会　ヘレンハルメ美穂**
（スウェーデン語翻訳者）

**北欧語書籍翻訳者の会**
北欧各国の言語の翻訳者が情報交換し、ともに翻訳技術を磨く会として、2018年秋に発足。
北欧の文学の認知度を高め、その社会や文化を紹介することにも力を入れている。

## 3 日本語で読むヨーロッパの最新グラフィックノベル （途中休憩あり） 14:50▶16:30

2016年11月にデンマークで出版されて以来、アメリカ、ヨーロッパ、韓国など世界17の国や地域で翻訳され、数々の賞を受賞した『ゼノビア』（日本語版はクラウドファンディングによりサウザンブックス社刊）のモーテン・デュアー、アムステルダムのゴッホ美術館からの依頼で制作され、ゴッホの晩年3年をモチーフにし、世界中20カ国以上で刊行されるベストセラーとなっている『ゴッホ 最後の3年』（花伝社、2018年）のバーバラ・ストックが、それぞれの作品を紹介します。

**モーテン・デュアー**
Morten Dürr
1968年生まれ。児童書作家。56冊の著書は18カ国で出版され、数多の賞を受賞している。2人の娘とともにコペンハーゲン在住。

**バーバラ・ストック**
Barbara Stok
1970年フローニンゲン生まれ。ジャーナリストを経て漫画家となる。子供番組や新聞向けのイラストレーターとして活躍。
©Gert Jan Pos

## 4 パネルディスカッション：Breaking Walls, Building Bridges 17:00▶19:00

二極体制の終焉をもたらしたベルリンの壁の崩壊から30年。以来、国としてのアイデンティティやイメージは大きく変化し、新たな局面を迎えているにもかかわらず、こうした変化による影響の全貌を、私たちはまだ捉えきれていません。国境を越えることは、物理的な壁のみならず、人々の心の壁、価値観や態度の違いを超えることでもあります。こうした変化は、ヨーロッパの作家たちが生み出す作品にどのように関与しているのか? 旧体制の崩壊によって約束された自由は達成されたのだろうか? ドイツ、チェコ、イタリア、ポルトガル、ベルギーの5カ国の作家たちが壁崩壊から30年後のヨーロッパ、そこに寄せる希望と不安を語ります。司会は芥川賞作家の小野正嗣。

**トーマス・ブルスィヒ**
Thomas BRUSSIG
ベルリン出身。作品は30カ国以上の言語に翻訳されており、小説のほかにも劇作品や映画の脚本も執筆。 ©Ambra Durante

**パヴェル・ブリッチ**
Pavel BRYCZ
1968年生まれ。作家、脚本家。小説やエッセイのほか、児童書も手掛ける。

©Chiara Ciccocioppo

**ヘレナ・ヤネチェク**
Helena JANECZEK
作家。ドイツ・ミュンヘン生まれ。イタリア在住。2018年、*La ragazza con la Leica* でストレーガ賞を、史上初のイタリア語非ネイティブの作家として受賞。

主催：EUNIC Japan
（在日EU加盟国文化機関）

©hiroki kobayashi

**ヴァルテル・ウーゴ・マイン**
Valter Hugo MÃE
1971年生まれ。2007年にジョゼ・サラマーゴ文芸賞を受賞し、現在はポルトガル文学界を牽引する作家として活躍。作家、音楽家、映像アーティスト。

**ヨハン・ローレンス**
Johan LAUWEREYNS
1969年、ベルギーのアントワープ生まれ。2010年以来、九州大学教授（専門は認知科学）。オランダ語と英語で20冊以上の詩、エッセイ、小説を出版。

© 講談社

**司会　小野正嗣**
Masatsugu ONO
小説家、早稲田大学教授。

DAY 2

# 11/3 日祝 イタリア文化会館 （開場 11:00）11:30▶18:30

会場　アニェッリホール　※日本語・英語同時通訳

## 1 世界の記憶としての杉原千畝の功績を語り継ぐ 11:30▶12:15

第二次世界大戦中「命のビザ」を発行し、6,000人以上のユダヤ人戦争難民の命を救った外交官、杉原千畝について、15年以上の年月を費やしてリトアニア、ポーランド、日本で調査を重ねてきた著者が、杉原を扱った最新作（英題：*The Good, the Bad, and the Miserable*、2020年に日本語訳刊行予定）に基づいてディスカッションを行います。

**シモナス・ストレルツォヴァス**
Simonas STRELCOVAS
1972年生まれ。歴史家。杉原千畝と戦争難民についての研究で知られ、著作多数。2020年に新作が日本語翻訳出版予定。現在、杉原千畝を含む難民についての歴史小説を執筆中。

## 2 イルゼ・アイヒンガー『映画と災厄』翻訳出版記念トーク　～半ユダヤ人として、女として、双子として～ 13:00▶14:00

オーストリアを代表する女性作家イルゼ・アイヒンガー（1921-2016）の自伝的エッセイ『映画と災厄』の日本語訳の出版を記念してドイツ語圏文学者3名がトーク。アイヒンガーの人物や作品の特徴について、作中で描かれるウィーンという場について、他のオーストリアの（女性）作家たちとの関係や、オーストリア文学における位置づけについてなど、アイヒンガーとその作品を様々な角度から語る。

**松永美穂**
Miho MATSUNAGA
早稲田大学 文学学術院 文化構想学部 教授。著書に『誤解でございます』など、訳書にベルンハルト・シュリンク『朗読者』（毎日出版文化賞特別賞受賞）、ヘルマン・ヘッセ『車輪の下で』など。

**真道　杉**
Sugi SHINDO
日本大学 法学部 准教授。戦後オーストリア文学を研究。訳書にイルゼ・アイヒンガー『縛られた男』（同学社）。アイヒンガーに関する論文多数。

**小林和貴子**
Wakiko KOBAYASHI
学習院大学 文学部 ドイツ語圏文化学科 准教授。20世紀ドイツ語圏文学、オーディオドラマやオーディオブックを研究。訳書アイヒンガー『より大きな希望』（東宣出版）。

DAY 3

## 3 朗読＆トーク：ヘレナ・ヤネチェク＆多和田葉子「母国語の多様性」 14:30▶15:30

日本初となるイタリア現代文学選集『どこか、安心できる場所で ― 新しいイタリアの文学』（仮）（国書刊行会、2019 年 10 月発売）の邦訳出版を記念し、同作品に短篇小説 *Trieste in love*（恋するトリエステ）が収録されているヘレナ・ヤネチェクと、1982 年よりドイツに住み、日本語・ドイツ語両言語で作品を手がけ、国内外で多くの文学賞を受賞している多和田葉子が対談します。聞き手は *Trieste in love* を翻訳したイタリア現代文学研究者の橋本勝雄。両作家による朗読も予定しています。

**ヘレナ・ヤネチェク**
Helena JANECZEK
作家。ドイツ・ミュンヘン生まれ。イタリア在住。2018 年、*La ragazza con la Leica* でストレーガ賞を、史上初のイタリア語非ネイティブの作家として受賞。 ©Chiara Ciccocioppo

**多和田葉子**
Yoko TAWADA
詩人、作家。ベルリン在住。芥川賞やクライスト文学賞をはじめ国内外の文学賞を多数受賞。世界各国で朗読や講演活動を行っている。

**司会　橋本勝雄**
Katsuo HASHIMOTO
京都外国語大学教授。ウンベルト・エーコ『プラハの墓地』（東京創元社、2016 年）他訳書多数。

## 4 朗読＆トーク：トーマス・ブルスィヒ「東西統一とその後」 16:00▶17:00

壁の崩壊とそれに伴う東西ドイツ統一について、ときに真摯に、ときに諷刺をこめて、旧東ドイツの生活を描いてきた作家のトーマス・ブルスィヒを迎え朗読と対談を行います。朗読では小説 *Wie es leuchtet* を取り上げ、続く対談では、ブルスィヒ作品の翻訳者でもある粂川麻里生（慶応義塾大学教授）が対談相手を務め、すでに失われた旧東ドイツを文学において回顧的に描くことについて、また作品の中のスポーツの位置づけについて考察します。

©Ambra Durante

**トーマス・ブルスィヒ**
Thomas BRUSSIG
ベルリン出身。作品は 30 カ国以上の言語に翻訳されており、小説のほかにも劇作品や映画の脚本も執筆。

**聞き手　粂川麻里生**
Mario KUMEKAWA
慶應義塾大学文学部教授・同大学アート・センター（KUAC）副所長。

## 5 朗読＆トーク：サラ・ボーム「文化と自然を翻訳する」 17:30▶18:30

作家およびビジュアル・アーティストとして活躍するサラ・ボームの処女長編『きみがぼくを見つける』（ポプラ社、2016 年）は高い評価を受け、各国語に翻訳されました。翻訳者の質問に答えるという経験を通して翻訳という行為に興味を持った作家が、翻訳とは何か、文化や自然をどのように翻訳するのか、『きみがぼくを見つける』の日本語訳を手がけた加藤洋子と語り合います。作品からの朗読も予定しています。

©Thomas Langdon

**サラ・ボーム**
Sara BAUME
1984 年、英国生まれ。幼いころに家族でアイルランドに移住。処女長編『きみがぼくを見つける』がガーディアン・ファースト・ブック・アワードにノミネートされる。

**聞き手　加藤洋子**
Yoko KATO
文芸翻訳者。主な訳書に、ボーム『きみがぼくを見つける』（ポプラ社）、クイン『戦場のアリス』（ハーパーブックス）など。

# 11/4 月祝　駐日欧州連合代表部（港区南麻布）　（開場 11:00）11:30▶19:30

会場　シューマン講堂　※日本語・英語同時通訳

## 1 朗読＆トーク：パヴェル・ブリッチ 11:30▶12:15

現代チェコ文学を代表するパヴェル・ブリッチが、北ボヘミアの町モスト（「橋」の意味）を舞台にした『私の失われた町』、『夜な夜な天使は舞い降りる』（東宣出版、2012 年）について、翻訳者の阿部賢一とともにディスカッションを行ないます。

**パヴェル・ブリッチ**
Pavel BRYCZ
1968 年生まれ。作家、脚本家。小説やエッセイのほか、児童書も手掛ける。

**聞き手　阿部賢一**
Kenichi ABE
東京大学準教授、チェコ文学研究者。

## 2 日本語で読めるハンガリー、ポーランド文学の最新事情 13:15▶14:15

『ヴォブルン風オムレツ コストラーニ・デジェー短篇集』（未知谷、2018 年）に続くコストラーニの邦訳第2弾の刊行に合わせ、訳者の岡本真理が作家の生まれ育った環境や風土、文化的背景などを紹介します。これを受け、ポーランド文学・スラヴ文学を専門とする沼野充義が、最近翻訳されて読めるようになったポーランドの文学作品を紹介しながら、文芸翻訳の最新事情などについて語り合います。

**岡本真理**
Mari OKAMOTO
大阪大学大学院言語文化研究科教授。近代ハンガリーの民族言語文学運動・文学史を研究。

**沼野充義**
Mitsuyoshi NUMANO
東京大学教授、スラヴ文学および現代文芸論研究者、文芸批評家、翻訳家。サントリー学芸賞受賞（2002 年）、読売文学賞受賞（2003 年）。

## 3 世界で活躍するヨーロッパの作家たち

### 第 1 部　スペイン、ポルトガル、フィンランドの3カ国を代表する作家による朗読と自作の紹介 14:45▶16:15

**メンチュウ・グティエレス**
Menchu GUTIÉRREZ
小説家、詩人、エッセイスト、翻訳家。マドリードとロンドンにてアートと文学を学ぶ。作品においては、自らが存在するという感覚を理解するために、人間の内面を深く探る必要があるという不思議を探求。

**ヴァルテル・ウーゴ・マイン**
Valter Hugo MÃE
1971 年生まれ。2007 年にジョゼ・サラマーゴ文芸賞を受賞し、現在はポルトガル文学界を牽引する作家として活躍。作家、音楽家、映像アーティスト。 ©hiroki kobayashi

**ミーア・カンキマキ**
Mia Kankimäki
1971 年生まれ、編集者、コピーライターとして活動した後、清少納言を題材にした処女作 *Things That Make One's Heart Beat Faster*（鼓動を高めるもの）（2013 年）を執筆。

### 第 2 部　オーストリア、ベルギーの作家による朗読と自作紹介に続き、芥川賞作家・上田岳弘とのトーク。日欧の文学界で活躍する作家たちによるセッション 16:30▶18:00

**トーマス・シュタングル**
Thomas STANGL
1966 年ウィーン生まれ。大学で哲学とスペイン語スペイン文学を学び、1991 年修了。90 年代はじめからエッセイ、書評、散文などを新聞や文芸誌に発表。

**ヨハン・ローレンス**
Johan LAUWEREYNS
1969 年、ベルギーのアントワープ生まれ。2010 年以来、九州大学教授（専門は認知科学）。オランダ語と英語で 20 冊以上の詩、エッセイ、小説を出版。

**聞き手　上田岳弘**
Takahiro UEDA
1979 年生れ。早稲田大学卒。2013 年『太陽』で新潮新人賞。『私の恋人』で三島賞。『塔と重力』で芸術選奨。『ニムロッド』で芥川賞。

## 4 クロージングイベント＆レセプション 18:30▶19:30

主催者による挨拶および各日の参加者と共に本年のヨーロッパ文芸フェスティバルを総括した後、ヨーロッパのワイン、ビールで乾杯しつつ、作家や翻訳家とファンの交流の時間を楽しみます。

※登壇者名はすべて敬称略とさせていただきます。
※セッション毎に事前申し込みが必要です。スケジュールは変更する場合がございます。最新の情報は公式サイトをご覧下さい。

European Literature Festival 2019

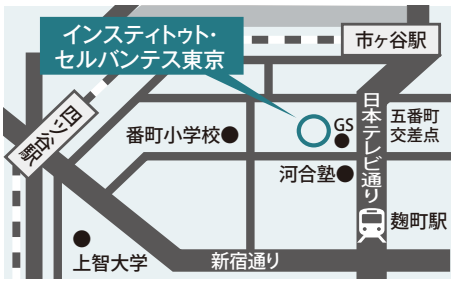
# ヨーロッパ文芸フェスティバル 会場

## DAY 1 11/2 土

Instituto Cervantes de Tokio

### インスティトゥト・セルバンテス東京

東京都千代田区六番町2-9
セルバンテスビル
東京メトロ有楽町線「麹町」駅（出口5,6）より徒歩3分
JR／東京メトロ有楽町線・南北線／都営新宿線「市ヶ谷」駅より　徒歩6分
JR／東京メトロ丸ノ内線・南北線「四ツ谷」駅麹町出口より　徒歩7分

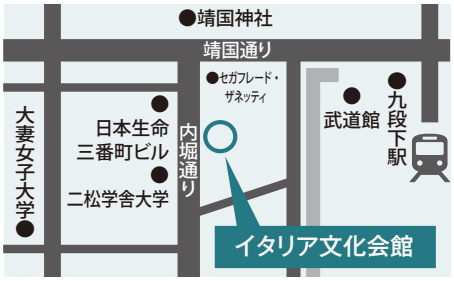



## DAY 2 11/3 日祝

Istituto Italiano di Cultura

### イタリア文化会館

東京都千代田区九段南2-1-30
東京メトロ東西線・半蔵門線／都営新宿線「九段下」駅（出口2）より
徒歩10分




## DAY 3 11/4 月祝

Delegation of the European Union to Japan

### 駐日欧州連合代表部

港区南麻布4-6-28　ヨーロッパハウス
東京メトロ日比谷線「広尾」駅（出口1）より　徒歩約10分

参加無料・要事前申し込み　プログラム詳細／お申し込みはこちら

eulitfest.jp

お問い合わせ：駐日欧州連合代表部　Tel. 03-5422-6001 (代)　www.facebook.com/eulitfestjp　@eulitfestjp